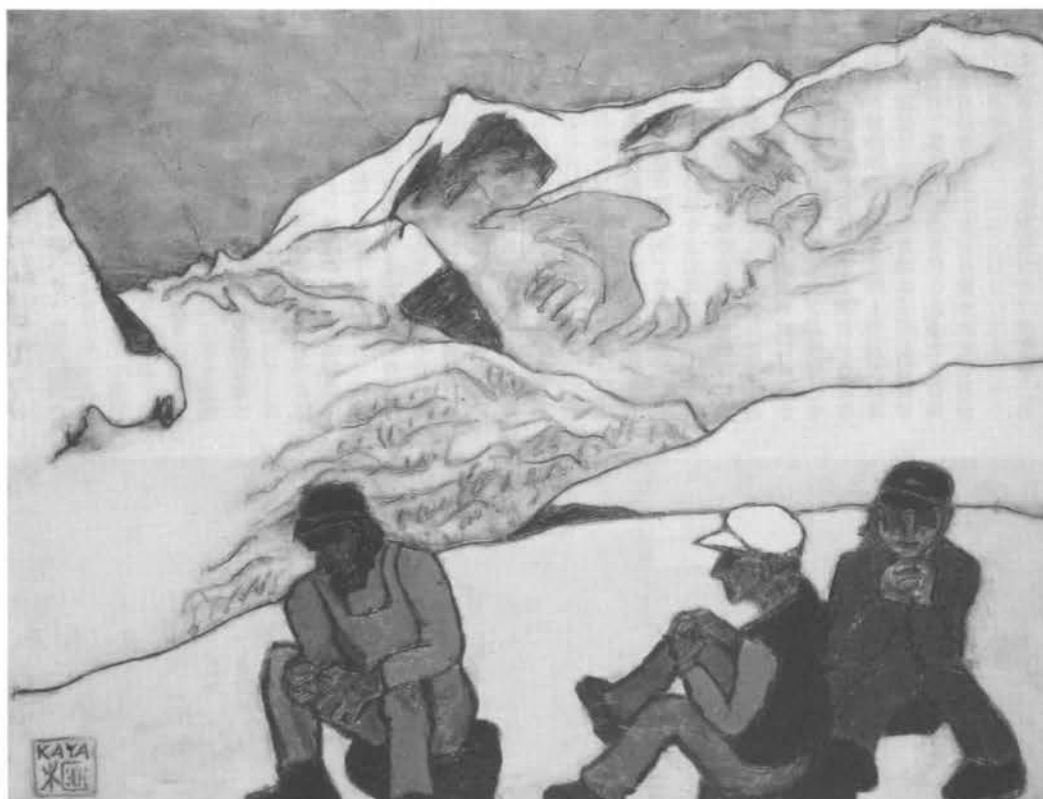


山と博物館

第46巻 第4号 2001年4月25日 市立大町山岳博物館

特集 大町山岳博物館創立50周年記念 特別企画展

くまがいかや
「熊谷樫油絵展 一山・雪・人」 4/21(土)～5/20(日)



「アルプスの氷河で一休み」(50号F、1988年) 熊谷 樫作

開催にあたって

大町山岳博物館は今年、開館五〇周年を迎えます。これを記念した事業のひとつとして、画家熊谷樫(くまがいかや)さんの特別企画展を開催いたします。

熊谷さんは一九二九年東京のお生まれで、ここ安曇野や当館にもゆかりが深く、現在もなお旺盛な創作活動が続けられており、全国各地で開催されている個展は一二〇回を超えています。

熊谷さんは、青年時代から山スキーの山行を限りなく愛されたとともに、国内はもとより数度にわたるヨーロッパ・アルプスをはじめとしてネパール・ヒマラヤ、インド・ヒマラヤ、パキスタン、グリーンランド、パタゴニア、アンデス、そして憧れのチベット・カイルアへと足を伸ばされています。このような背景からテーマである「山・雪・人」熊谷樫の世界が生まれてきたのではないでしょう。

絵具は独特の技法で重ねられ、不思議なくらい鮮やかな発色と、滑らかな表面が生みだされています。アルプスの峠や雪原のなかで、まばゆい山嶺や流れる雲、そして男たちや時として動物などが、大らかでとらわれのない独特の輪郭と色彩とで描かれていて、温もりが伝わってくるのです。

この機会にぜひ大勢の皆さまにご高覧ください。よろしくお願いいたします。

(大町山岳博物館創立五〇周年記念事業
実行委員会・市立大町山岳博物館)

大町山岳博物館創立五〇周年記念 特別企画展 「熊谷榎油絵展 — 山・雪・人 —」によせて

熊谷^{くまが} 榎^{かや}

山を描くために山に登ったつもりはなかったが、スケッチブックを持たずに山に入ったことはない。山を描きはじめて頃は色紙を手でちぎってベニア板にはる貼り絵だったが、あまり色が変わってしまうので、いつの頃から油絵を描くようになった。私の油絵は現場では描けないから、山には水彩を持って行く。色をつける時間がないときは、ソフトペンの走りがきだ。いつかスケッチブックが通し番号で六七〇冊となった。

山では荷を軽くするためにペラペラの紙のスケッチブックを見開きにして、油性のマジックインキで線をかき水彩で色をつけていく。一枚約十五分。それでも絵かき仲間とあまり山に行かない私はみんなにおいていかれて、まだぬれているスケッチブックをクリップにはさんでみんなのあとを追うことになる。

はじめて油性のマジックインキを使うようになったのは、今から四十何年前、北穂小屋の小山さんたちと大町の扇沢から雪の針ノ木峠をこえて、立山・剣を登って弥陀ヶ原を滑り下りた大山行のときからだ。水彩は描く先から凍り出したが、マジックインキはオーパー手袋の上からで掴めた。

全く時間がないときはザックをおろしてスケッチブックをとり出す手間ははぶいて、胸に吊した特製のスケッチ・バックのチャックを開いて小型のスケッチブックに水性インキで線がきだけする。水性だと裏にしみないので、表裏に描けて一冊三十枚描ける。一枚が約三分。山スキーでみんなと一緒に滑っているときなどともつばらこの小さなスケッチブックだ。

前にヨーロッパのシャモニーからツェルマ

ットに越える一週間の山スキーでは、一回目はばてにばてて絵どころでなかったのが、二回目のときはこのスケッチ・バックが役に立った。仲間に下手なスキーヤーがいると最後が降りてくるまで時間があるが、自分がどんじりではどうしようもない。

六十過ぎまでカメラというものを持ったことのない私だったが、東北の山スキー一〇〇コースをかけた奥田さんにすすめられて、最近小型の軽いカメラを持つようになった。今まで写真から絵を描くなんてとんでもないと言っていたのが、突然豹変して。とはいってもの一筆がきでも自分で描いてこないと絵がかけない。現場で描いたスケッチブックの中から気に入ったスケッチを、逗子のアトリエで油絵にする。

私の油絵はオーソドックスに習ったことがないので全く自己流だ。まずキャンバスにシルバーホワイトをパレットで厚く地ぬりし、乾かないうちに筆の軸などで線をえがく。更に黒とか青とか赤をおつゆにといて表面にぬる。床に水平にしておくと線がきしたところに絵具がたまつて線が浮き出す。更にそれが乾いたら本画にとりかかり、テンの筆で色を置いていく。こんな画法なので表面がなめらかで発色が鮮やかなので、これもやっている。と陶絵と間違えられることがある。展覧会で一緒に並べてみると「え？ こんな大きな陶絵ができるんですか」などと聞かれたことがある。

ここにある①「秋の瀧谷」や「瀧谷第二尾根」は今から何十年も前のスケッチブックから今年新しく油絵に描いたものだ。私が最初に出した画文集「晴れのち曇り曇りのち晴



②「中岳から檜」20号M、2001年作



①「秋の瀧谷」12号F、2001年作

れ」が平凡社の文庫版になることになり、新しくカットをなどと云われて昔のスケッチブックを引っ張り出したら、面白くてそれをもとに二十点ほどかいた。穂高の山は昔と変わらないうし、はじめて山を見た感動は昔の方が大きい。

「五月の湖沢」や「朝焼の檜」などは一九五八年の春、はじめて雪に埋もれた北穂小屋に登ったときのスケッチをもとに描いた。もう七十二才の私の体力では、二度と雪の穂高を訪れることが出来ないうちから。②「中岳から檜」や「雪巻く大天井岳」などはその後の一九八四年の夏、ひとりで尾根歩きしたときのものだ。

私は宿の窓から山を描くというのは苦手で、その山に登ったりそれから滑り下りたり山とかかわらないと描けない。山に登るまでの過程が面白いのであって、山頂に着いてしまうと描くものがなくて、足もとの自分の山靴の足をスケッチしたりして、「せっかく山頂に来たのにカヤさん何かに笑われるのよ」と山仲間から笑われる。足の描きはじめは「三足のスキー靴」というのはじめて島海山の

山スキーに行ったときのものだ。③「吹雪の地獄沢」は八甲田山の強風の中で、じっと一



④「休むそり犬たち」(グリーンランド) 50号F、1979年作



③「吹雪の地獄沢」30号F、1981年作

時間半はぐれた仲間を待っていたときの自分のオーパスボンとミトンの手だ。それからは「北穂高南峰」のようにちよつこり自分の足が画面の下に出たりしている絵がある。ここにはないが太郎平小屋から双六小屋まで一日でスキーで越えたとき、黒部五郎の氷壁のカールを滑りおえて小屋の前で、京都の山屋・沼田さんの本もののコーヒを開んだ四人の足というのもあった。

外国の山であまり人が行っていないのは、グリーンランドの山だろう。一九七六年と七九年に二度行っている。④「休むそり犬たち」は氷海を犬ぞりで走ったときのものだ。「デオチバ山麓のお花畑」と「焚火を囲むボーターたち」は一九七四年と七八年にインド・ヒマラヤにトレッキングに行ったときのもので、今回持ってきた油絵で最も古いものだ。究極のトレッキングと言われるバルトロ氷河の絵は「ボーター・ケリム」と「トラシゴタワ」と休むボーター」だけだ。ネパールのシヤクナゲの花におおわれたランタンの山などとうって変わって、パキスタンの山は砂漠で、氷河の上でさえ灼熱地獄になるのには参った。

ネパール・ヒマラヤには一九七二年以来何度か行っているが、ここにある⑤「新雪のきたヤク・カルカ」はわりと新しく西ネパール・ツクチェの裏山で描いた。「夕暮れのムクチナート」「ローママンタンのマニ石」はムスタントレッキングのものでここ数年のもの。ケルンにチベット仏教の五色旗がはためく⑥「カロ峠」は一九九五年ラサからカトマンズまで車で通ったときのもので、自分が登った山ではない。「ルンタラとカンチェンジュンガ」もシッキムに行ったときのものだ。チベットはこのあと一九九九年にあこがれのカイルアをめざしたが、「ヤ



⑥「カロ峠」(チベット) 80号F、1995年作



⑤「新雪のきたヤク・カルカ」50号F、1997年作

クとナムナニ山」はカイルアの向いの山で、「カイルア西壁とシェルバ」はカイルアを一周する一日目のテント場からの眺めだ。ヨーロッパアルプスには何度も山スキーに行ったが、「シムラウンヒュッテ」はオーストリーのエッツタールの山小屋の絵だ。「レザン峠から」は一九九五年最後にフランスに山スキーに行ったときのもの。一九六四年に父の個展がパリであったときにはじめて訪れた、ラ・メイジュとレクランを遠望して昔をなつかしんで描いた。今年の正月八甲田山の山スキーで深雪を滑りすぎまた膝を痛めてしまったので、もうヨーロッパ・アルプスの山スキーは無理だろう。

去年行ったボリビア・アンデスの「アルティプラノ」で遊ぶ子どもたちは、高度五千メートルの高原にリヤーマやアルバカと現れたインディオの子どもだ。「アイマラ族の供

物」はインディオの神・パチャママに旅の安全を祈って、ガイドが峠の岩の上で燃したり



⑧「鳥海山の稜線」40号S、1999年作



⑦「ウルタ峠のリヤーマ」30号F、2000年作

た言葉から生まれた絵だ。「旭岳石室」は雪が吹きこんだ石室の中でテントをはり、同じ

「雪の上の日向ぼっこ」という横長の大作は画文集『スキーをはけば怖くない』の取材で、月山の山スキーに行ったときのものだ。まさか上半身裸で日向ぼっこしたわけではないが、姥沢の山頂の平らで寝そべって日向ぼっこした気持ちよさを現したかった。「山スキーヤー空にのぼる」は、北海道の山スキーに行ったとき、私の陶器の先生・アブストラクトの陶芸家川口君がムイネ山にシールをつけたスキーで登りながら、

「もしここに山頂がなければ、そのまま空に登って行けそうだな」と言った言葉から生まれた絵だ。「旭岳石室」は雪が吹きこんだ石室の中でテントをはり、同じ

ヤーマの胎児の骨と家やハート型をした砂糖菓子だ。⑦「ウルタ峠のリヤーマ」は一年行ったペルー・アンデスのときのことで、ボリビアと違ってペルーではリヤーマは飼われていて、荷運びは十五頭のロバがしたのだが、観光用にリヤーマ三頭をつれて行った。こいつがちょっとも言うことをきかず荷物置いてくわ道草はくうわで馬方を手こずらせていたが、私のよい絵のモデルになってくれた。

熊谷 榎 略歴
一九二九年 画家・熊谷守一の二女として東京で生まれる。
一九五一年 絵と関係ない日本女子大学を卒業する。

川口君と札幌の金井さんが盛りこんでバーナーを開いているのが面白くて描いた。最近の絵だが⑧「鳥海山の稜線」は同じ金井さんの山スキーが手なれたベテランぶりと、和歌山の焼きしめの陶芸家シゲさんの山スキーはじめてのびっくりにした顔のとりあわせが面白くて、急斜面の遠景につかまりながらスケッチした。少し前だが「マタギと山」はシゲさんのお得意の大峰の沢登りの途中で、地元のマタギと一緒に描いた。大峰の山は穂高の山とも東北の山とも違う独特のくささと山深さをもっている。

「雪洞でぬいだ靴」は札幌の山屋・中川さんの案内でよく山スキーに行っていたころの絵で、芸術的とも言える立派な雪洞の中でローソクの火が美しくかった。「雪の中の昼食」はやはりその頃、札幌の青木先生夫妻に案内されて砥石山に登ったところ、私のスキーの締具がこわれてこのスケッチを描いて引返した。「五色温泉野天風呂」はテレマータスキーのベテラン山本さんの一行と同行したとき、ニセコの北壁から一気に滑り下り温泉にそのままだぼん！という面々を外から描かせてもらった。

白馬村八方のスキーヒュッテ「白い小屋」に一九五八年から十三冬を過ごしたから、もっと白馬の絵があってもいいのだが、数えるほどしかない。「こぶしの花と白馬三山」はグレンデの終わり近い春の匂いだったよう白馬を思い出して最近描いた。

こうして自分の絵を一同に並べて見る機会を与えられて有難く思っています。この三十年来描いた外国の山二十点と日本の山四十点を、どうぞ楽しんで見て下さい。
(画家・熊谷守一美術館主)



「雷鳥沢のテント場」
(10号S、2001年)

一九五三年 日本美術会に入り毎年「アンデパンダン展」に出品する。
一九五四年 はり絵の個展をはじめて開く。油絵も描きはじめる。
一九五八年 「山・雪・人」のテーマで毎年各地で個展を開き二一〇回を越える。
一九六一年 日本山岳画協会員となり毎年出品する。
一九七〇年 はじめて画文集を出版する。
一九七七年 陶彫・陶絵も手がけるようになる。
一九八五年 父の旧居に熊谷守一美術館を創立する。
熊谷守一美術館
〒171-0044 東京都豊島区千早二二七六六
TEL 〇三三三三九五七―三七七九
FAX 〇三三三三九五七―三七七九
〒291-0002 千葉県市川市山ノ根三一―一九一七
TEL 〇四六八―七一一六二七三

人事異動のお知らせ

平成十三年四月一日付で大町市教育委員会生涯学習課文化財係より岩村隆学芸員が山岳博物館学芸員として転入いたしました。

山と博物館第46巻第4号

発行 一九〇一年四月二十五日発行
〒長野県大町市大字大町八〇五六一

市立大町山岳博物館
TEL 〇二六―二二二二〇二
FAX 〇二六―二二二二二二

印刷 大糸タイムス印刷部
定価 年額一、五〇〇円(送料共)切手不可

郵便振替口座番号 〇五四〇一七三三三